

ユーザー訪問
トランスストロン

危険マップを有効活用 安全向上に大きく寄与

浜一運送

浜一運送（本社・横浜市、田島和夫社長）は、富士通グループ・トランスストロン（同、加藤裕三社長）のデジタル式タコグラフ（運行記録計）を使い、安全対策を強化している。昨年末には最新機種「DTSC1」を導入。通信機能を生かした車両の動態管理や、急ブレーキ多発地点を音声で知らせるシステムをフル活用し、事故防止の取り組みを加速させる。（小林 孝博）

横浜市と川崎市の中央卸売市場に全国の水産物を他の市場に販売し、拠点をつなぐ浜一や御間屋、量販店の物流センター、店舗などに配送している。



安全のため、全車に「DTSC1」を導入。情報を指導に活用する

「導入以降、ドライバーの安全意識が大きく高まった」と荒川正常務。運転が点検評価されることで、運行管理者は的確な指導ができるほか、ドライバー自身も「何が足りないのか」を考えるとようになった。昨年十二月には安全のさくら早朝が多くなるレベルアップを図るに気を遣うため、富士通のネットワークに業務を行う。このためアルタイムの運行管理ができる「DTSC1」に切り替えた。

見知らぬ土地でも安心運転
速度などのデータもドライバ最新機種の導入からまだ四カ月だが、「ドライバーの

評判はとても良い」と営業部の村木寛之部長。特に車両が急ブレーキ多発地点に差し掛かると音声で警告する運行支援サービスが、ドライバーの安全意識を従来以上に高めているという。

トランスストロンが昨年七月に始めた同サービスは二万台のデジタル式タコグラフを集めた急ブレーキ情報を基に、富士通のビッグデータ分析（※）を使って「危険地点マップ」を作成。月一度のペースで更新され、車載器には二万件分の情報が登録可能だ。



「今後も安全の取り組みを強化する」と浜一運送の荒川常務（右）と村木営業部長

「自社だけでなく他社の情報も踏まえて使えるのが魅力。水産物の輸送は仕事で急ぎよ入ることも多い。ドライバーは慣れない地域に行っても、どこが危険か案内してもらえらるから、運

転に集中できる」（村木部長）。

通信機能で負担を軽減
また、通信機能でリアルタイムに車両の動態管理ができ、顧客対応もよりスムーズに。これまでは荷主から問い合わせがあるたび、ドライバーに電話をかけた。店着時に報告をさせたりしていたが、こうした手間が無くなった。

事務所から送った任意のメッセージを、デジタル式タコグラフの富士通製だったのでも、クラウド型への移行もスムーズ

最新のデジタル式を導入し、着実に安全の取り組みを進める浜一運送。「ドライバーからはどこが危険地帯なのかを覚えたから、警告を止めてほしいと言われるほど安全意識が高まった」と村木部長は笑う。

今後も車載機の情報を使った安全指導や必要に応じた講習の受講などに努め、事故ゼロの環境を目指す方針だ。

※ビッグデータ分析：サイバーに集約された大量のデータを高速で分析すること



デジタル式タコグラフの富士通製だったのでも、クラウド型への移行もスムーズ